

第13回 京都建築賞 結果発表

主催 一般社団法人 京都府建築士会
後援 京都府・京都市・宇治市

京都建築賞は、京都府建築士会の創立60周年を記念して創設されました。

京都の歴史的文脈を踏まえつつ創造性の高い建築作品を表彰し、その活動及び業績を

広く社会に伝えることにより、京都及び建築の継承・発展に資することを目的とするものです。

第4回からは、次代を担っていく建築士の支援を目的として、京都建築賞に特定のテーマを設定する新たな部門「藤井厚二賞」を創設しました。

建築

最優秀賞

京都市立芸術大学・京都市立美術工芸高等学校

設計者

乾久美子（有乾久美子建築設計事務所）

郷野正広・上條美枝（株）RING ARCHITECTS）

藤原徹平（株）フジワラテッペイアーキテクツラボ（一級建築士事務所）

大西麻貴・百田有希（株）OONISHI（一級建築士事務所）

中原春生（一級建築士事務所）（株）吉村建築事務所

佐々木睦朗（株）佐々木睦朗構造計画研究所

満田衛資（株）満田衛資構造計画研究所

平岩良之（同平岩構造計画）

慶祐一（株）竹中工務店

小松敬（株）総合設備計画

優秀賞

静原村の家

設計者

森田一弥（森田一弥建築設計事務所）

優秀賞

京都女子大学E校舎

設計者

尾口晴基・恵本涼太郎・橋本阿季（株）日建設計

優秀賞

越後町の家——路地を抜く家——

設計者

川上聡（川上聡建築設計事務所）

Rafael A. Balboa（STUDIO WASABI）

奨励賞

京北森林組合 木造倉庫

設計者

高橋勝（高橋勝建築設計事務所 一級建築士事務所）

〔審査委員会〕

委員長

西沢立衛（西沢立衛建築設計事務所）

委員

前田尚武（京セラ美術館学芸員）

三澤文子（有エムズ建築設計事務所）

古代象形絵文字作家 竹本大亀氏

プロフィール

1952年、滋賀県大津市生まれ。高等学校にて芸術科目として書道を選択、ライフワークとして書アーティストへの道を歩む礎を高校生時代に築き、書一筋の人生を歩み、独自の世界を築いている。

漢字のルーツが絵文字であることに注目。現代の文字は絵・絵文字が記号化・符号化いわば文字化したもの、またそれは絵が抽象化したものとも言え、現代の文字を具象化することで絵文字ならではの表情や生命感を再現し、書道界に新境地を開き独自の世界を展開している。

甲骨文字や青銅器文字を用いて、世界平和や人類の幸福を神に祈願するという揮毫活動を行っており、初回は1997年の阪神・淡路大震災後の復興を祈願して生田神社で行い、以後、青蓮院門跡・清水寺・八坂神社等で奉納祈願揮毫を行う。2012年以降は京都・松尾大社の正月行事として神に通じる古代神聖文字にて、この一年をこの文字のもと、ポジティブに歩むという1字を募集、奉納祈願揮毫を行っている。

設計者：乾久美子／(有)乾久美子建築設計事務所、郷野正広・上條美枝／(株)RING ARCHITECTS
 藤原徹平／(株)フジワラテッペイアーキテクツラボ一級建築士事務所
 大西麻貴・百田有希／(株)o+h一級建築士事務所、中原春生／一級建築士事務所(株)吉村建築事務所
 佐々木睦朗／(株)佐々木睦朗構造計画研究所、満田衛資／(株)満田衛資構造計画研究所
 平岩良之／(同)平岩構造計画、慶祐一／(株)竹中工務店、小松敬／(株)総合設備計画



2025年 京都建築賞 審査講評

審査委員長 西沢立衛

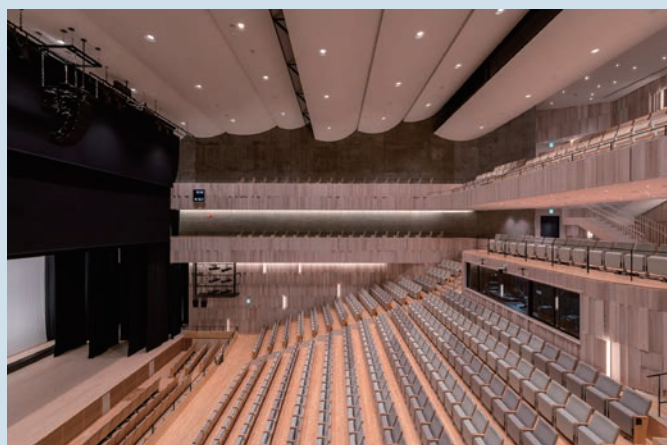
五作品を現地審査した。どれも力作揃いであった。その中で最優秀となった「京都市立芸術大学」は、五作品の中でひとつ飛び抜けていた。建築計画と街区計画の融合、また公共空間や学び空間の提案など、規模の大きさとプログラムの性格、立地状況等本計画の条件にふさわしい建築提案がなされ、その多くが成功していると感じられた。「京都女子大学E校舎」は、スケール感において多少窮屈な印象があったものの、本学のデザインコードを踏襲しつつ抑制の効いた意匠と中庭形式、地形利用などに好感を持った。「越後町の家―路地を抜く家―」は、京都の路地に着目した町家改修プロジェクトで、伝統的な町家を海外の人でも住めるように国際化した点が注目される。「京北森林組合木造倉庫」は、地域と地場産業にあった木造による建築で、そのシンプルさと木造らしさに好感を感じた。「静原村の家」は、設計者自ら移住して営むプロジェクトで、過疎化が進む村落の未来という意味で、たいへん示唆的なモデルの一つと感じた。

【講評】

2023年、両校は長年の構想を経て京都駅東部の崇仁地域に移転・開校した。本計画は教育施設の整備を超え、「文化芸術都市・京都」の未来像を体現し、都市再生の核として新たな拠点を築いた点で画期的である。計画の骨格には、京都の都市構造に根ざした「通り」「突抜」「奥庭」といった要素が再編され、「大きな軒下」や「芸大通り」といった公共空間が生み出された。三街区を貫く建築群は、市民や観光客がまち歩きのように芸術と出会い、交流できる都市型キャンパスを実現している。特筆すべきは、地上約7mと20mに設けられ



所在地／京都市下京区
 用途／C地区：学校(大学)、劇場(音楽ホール)、展示場(ギャラリー)、事務所
 B地区：学校(大学)
 A地区：学校(大学・高校)
 竣工／2023年8月
 敷地面積／15,831.65㎡(C地区)、6,039.57㎡(B地区)、12,636.38㎡(A地区)
 建築面積／10,227.42㎡(C地区)、2,967.05㎡(B地区)、8,168.66㎡(A地区)
 延床面積／46,532.59㎡(C地区)、9,478.11㎡(B地区)、18,285.46㎡(A地区)
 構造規模／C地区：地上7階、地下1階建て
 B地区：地上5階建て
 A地区：地上4階建て



た二層の人工地盤Ⅱマトリクスである。歩行者空間と広場を結ぶこの構造は都市に新たな基盤を与え、多様な活動を包摂する。その理念は、1997年完成の京都駅ビルが示したマトリクスに通じる。駅ビルは10〜15mに人工地盤を構築し、駅機能や商業、文化施設を重層的に配置して南北を結んだ。しかしその後20余年、駅周辺の開発は個別に進み、統一的な都市計画の欠如が指摘されている。

この状況で、新キャンパスは駅前と東山の文化・教育ゾーンを結び直すだけでなく、駅周辺開発を根本から問い直す挑戦的な試みである。文化と教育を媒介に連続性を生み出したこのプロジェクトは、地域に根ざしつつ普遍的な都市像を提示し、京都駅周辺のマスタープランを再構築し、未来の京都を示す起爆剤となるかもしれない。

(前田尚武)

設計者：森田一弥／森田一弥建築設計事務所



所在地／京都市左京区
用途／住宅・事務所・工房・宿
竣工／2023年9月
敷地面積／1652.44㎡
建築面積／521.94㎡
延床面積／790.17㎡
構造規模／木造2階建て



【講評】
神話の時代に創建されたと伝わる静原神社の前の道を西に行くと「静原村の家」の事務所棟がある。車庫を改修したこの事務所から高低差のある道を下ると南に3棟の古民家を改修した棟が連なっている。西から197番地の事務所十離れ棟、203番地の自宅工房棟、そして207番地の宿泊棟。まず始め197番地の古民家を改修して住み着いたところから、順々に、縁がつないでくれるように既存建物に出会い、取得し、改修して暮らしや活動の場を広げていったという。縁とは村人との出会いである。4棟の建築群が「静原村の家」なのだ。3棟の古民家は原型の架構を尊重し、地元の人たちの住まいではほとんど使われない2階をメインの生活スペースにして、驚くほどの見晴らしの良いそして明るい空間ができている。この土地のもつ魅力を最大限に生活に活かし取り込んでいるのだ。おそらくご近所の方々が訪ねてくれば驚くに違いない。当たり前と思っていた暮らしの考え方が、この空間でゆっくりと変化していくのではないだろうか。

改修方法は、無理をせずにバランス良く。できるところから取り組んでいる姿勢も現実的で好感が持てる。工房棟では伝統的木造架構の特性を活かす耐力壁の開発に取り組んでいることや、今後の方針など見せていただき刺激的であった。静原村の集落に溶け込みようにそこで活動する民家群は、消費する建築でない、生きて活動を続ける建築に見え、とても眩しいものだった。

(三澤文子)

設計者：尾口晴基・恵本涼太郎・橋本阿季／(株)日建設計



所在地／京都市東山区
 用途／学校(大学)
 竣工／2021年2月
 敷地面積／13,414.46㎡
 建築面積／1,377.55㎡
 延床面積／5,374.4㎡
 構造規模／地上2階、地下2階建て



【講評】

東山エリアにキャンパスを構えている京都女子大。このE校舎は、全キャンパスのほぼ中心に位置していて、数年前に竣工したという図書館も近くに見える。E校舎の敷地は、およそ3層分の高低差があったとのことだが、それを感じさせない計画力は素晴らしい。地下1階、地上3階建ての校舎は小さな切妻屋根が連なる形。大きな一つの屋根で造られた校舎が見せる威圧感はなく親しみやすい優しさがある。建物の表情もレンガタイルの素材の色が活かされて馴染みよい。地下1階からも大きな空が見えて、グランドレベルの中庭からは地下の教室がのぞき込める。このように中庭が2層につながっているようで、地下ホールとしての中庭からは各教室にアクセスできる。この地下につづく中庭のおかげで、そこは地下感覚がなく歩いていてもとても気持ち良かった。

壁のレンガ仕上げは、RC造の低層部と鉄骨造の3階では工法が異なるものの、同じように見せるために細かい工夫があり、さらにレンガタイルの質感へ追求、また研ぎ出しの床の仕上げなど、素朴な素材も素材感を活かして手間をかけることで、上質な仕上げに変えていくクラフトマンシップな設計の姿勢が見て取れうれしい気持ちになった。これからの女子大学のあり方についての課題にも応えようとして取り組んだ、大学校舎の真摯な設計姿勢に敬意を表したい。

(三澤文子)

越後町の家 一路地を抜く家

優秀賞

設計者：川上聡／川上聡建築設計事務所、Rafael A. Balboa／STUDIO WASABI

所在地／京都市中京区
用途／住宅
竣工／2024年11月
敷地面積／116.34㎡
建築面積／92.15㎡
延床面積／177.56㎡
構造規模／木造2階建て



【講評】
京都市中京区の路地に面する町家を改修し、海外在住の芸術家の拠点とした本計画は、「町」と「家」の関係を再定義する試みとして注目に値する。既存の間仕切り壁を撤去し、六角通から奥庭までを貫く通り土間を設けることで、町の路地空間をそのまま室内へと引き込んだ構成は鮮やかである。とりわけ印象的なのは、既存木造に寄り添うように挿入された梯子状のスチールフレームである。これは土壁に相当する耐力を補いながら、棚や装飾として日常生活を受け入れる柔らかな構造体であり、建築と家具、構造と暮らしが交錯するスケール感を生み出している。そのリズムが三層吹抜けの空間に方向性を与え、光や風の流れと呼応して、町家の奥行きを立体的に体験させる仕掛けとなっている。改修を通じてこの町家は、通りと庭、路地と内部空間が一続きとなる「みちの体験」を内包する場へと転換された。町と家の境界をほぐし、都市のスケールを建築の内部に重ね合わせた点は、町家再生の新しいモデルといえる。京都における歴史的ストックの活用において、単なる保存や再現を超え、都市と建築の関係性を更新する優れた実践であり、今後の京都の都市環境を考える上でも示唆に富む計画として高く評価したい。

(前田尚武)

設計者：高橋勝／高橋勝建築設計事務所一級建築士事務所



所在地／京都市右京区
 用途／倉庫兼車庫
 竣工／2024年9月
 敷地面積／489.01㎡
 建築面積／157.83㎡
 延床面積／247㎡
 構造規模／木造(在来軸組工法)2階建て



【講評】

京都の京北地域は古くから北山丸太の生産地として全国的に有名である。その京北森林組合の林業施業用資材倉庫および車庫である。この京北の地に立ちあたりを見回しても「京北森林組合 木造倉庫」のほかは木造で目を引く建物はない。かつてこの地が林業で繁盛を誇っていた時代は、おそらく木造倉庫や木造商家が軒をつらねていたことだろう。それが鉄骨の倉庫や社屋に変わっていった時期から、おそらく林業の低迷が始まったのではないだろうか。そして今、この「京北森林組合 木造倉庫」は、これからの木材の、木造の可能性を伝えてくれるようなメッセージ性をもつ存在であることを強く感じる。明快で軽快な軸組は永く既存倉庫に眠っていた在庫利用だという。施工は大工工務店の元、大工を目指す学生が取り組みという大工実践教育プログラムが組み込まれてもいる。学生施工のため考えられたという挟み梁工法も、それが建物を軽快に見せている。特徴的な前面に見える深い軒。その桁を京北の見事な長材の磨き丸太が類杖材として支えている。木組みを尊重して構造材が外壁ラインから飛び出したツノに、鳥かごのように見えるかわいい小庇を付けているのも愛らしい。京北にこのような魅力的な、そして愛されうる小さな木造倉庫ができたことが、この地の林業や林産業そして、大工など木造を支える職人育成の応援につながる起点となることを心より期待したい。

(三澤文子)

第13回 京都建築賞

藤井厚二賞 結果発表

主催 一般社団法人 京都府建築士会
後援 京都府・京都市・宇治市

藤井厚二賞

大原の家

設計者 森田一弥（森田一弥建築設計事務所）
小寺磨理子（AMK）

現地審査選出作品

京北森林組合 木造倉庫

設計者 高橋勝（高橋勝建築設計事務所 一級建築士事務所）

萩ノ台の住処

設計者 殿井環（一級建築士事務所 殿井建築設計事務所）

越後町の家―路地を抜く家―

設計者 川上聡（川上聡建築設計事務所）

熊間

設計者 浦田友博（一級建築士事務所 浦田）

東裏辻BLDG

設計者 浅野大輔（株ボラ設計）

〔審査委員会〕

奥谷繁礼（奥谷繁礼建築研究所）
服部大祐（MIDW）
松隈章（聴竹居倶楽部代表理事）

藤井厚二賞は、幾多の実験住宅の計画を通じて卓越した洞察力、探究心、行動力をもとに新しい建築のあり方を追求した藤井厚二氏に敬意を表し、先人の叡智に学び、新たな挑戦をしている建築士の飛躍の一助となることを意図しています。

今回のテーマ「つきぬける執着」には14作品の応募があり、3月26日の書類審査により現地審査対象の6作品を選出。5月15日に現地審査を行い、慎重な議論の結果「大原の家」が藤井厚二賞に選出されました。

2025年 藤井厚二賞 講評(審査経過)

奥谷繁礼

2024年12月12日、審査委員3名により今年度の藤井厚二賞のテーマについて議論をし、「つきぬける執着」に決まった。書類審査は2025年3月26日に行った。審査委員の過半が現地審査の候補に挙げた作品に、各審査委員がどうしても現地審査の対象としたい作品を加え、現地審査の対象を決定した。今年度は応募数も多く、そして実際にその建築を訪れたいと思うものも多く、例年は5作品を目安に現地審査対象を選定しているところを、今年度は6作品を対象とした。

現地審査は5月15日に行った。建築士はもちろん、建築主をはじめとする関係者の多大なるご理解とご協力により、無事に対象の6建築を存分に堪能することができた。

その後、場所を移して藤井厚二賞1作品を決定する議論を行った。各対象作品について各審査委員が講評を述べた後、まずは3人それぞれが賞に推したい作品を3つずつ挙げたところ、「大原の家」と「京北森林組合木造倉庫」が3票、「越後町の家」が2票、「萩ノ台の家」が1票を獲得した。次に、それぞれが挙げた3作品の中で特に藤井厚二賞に推したい作品を1-2作品挙げたところ、「大原の家」と「京北森林組合木造倉庫」に票が集中した。賞の対象をこの2作品に絞る前に、その他4作品をあらためて1つずつ見直して議論した結果、対象を「大原の家」と「京北森林組合木造倉庫」の2作品に絞ることとした。そこからの、どちらを今年度の藤井厚二賞とするかの議論がなかなかまとまらなかった。審査委員同士で推す作品が異なったからではなく、何れの審査委員も両作品になかなか甲乙つけ難かったからである。延々と議論した後、藤井厚二賞の意義をあらためて確認し、設計監理での執着の成果が実際の建築の佇まいや内部空間に現れていた「京北森林組合木造倉庫」以上に、道路ではなく地形に沿って正方形平面の民家形式の建築を配置することに執着することで新しい普遍性を獲得した「大原の家」こそが藤井厚二賞に相応しいと三人で合意し、今年度の藤井厚二賞を「大原の家」に決定した。

「藤井厚二賞」「大原の家」

この建築が建つのは山間部であるが、市街地からも遠くなく、近年、少なくない住宅が新築されている。そしてそのような住宅の殆どが町家形式で建てられている。町家形式とは、道路に面して建ち、オモテとウラに開けて、側面が塞がれた形式である。このような住宅群に対し、「大原の家」では民家形式が採用されている。民家形式とは、道路から距離をとって建てられ、矩形平面の四方に開かれた形式である。加えてこの建築は、道路からセットバックするだ

けではなく、道路ではなく地形に沿って配置されており、結果、道路に沿って配置された周囲の住宅とは角度のずれた配置となっている。

1階では、正方形の平面形状の四方に下屋庇がつけられており、長方形の平面形状の一般的な民家以上に四方に開かれているように感じる。道路から距離をとり、かつ道路とは平行でないため、それぞれの庇下空間の先にも地面が広がる。両隣に近接して建物が建つ市街地の敷地とは異なる山間部の敷地だからこそその拡がりである。

2階にあがると、高さが限定されつつも四周に廻る水平横長窓により、周囲への眺望が開ける。同じ山でも距離の近い東側の山は原生林のような木々であり、距離の遠い西側の山はどこまでも連なっていく稜線であり、この山間部にいることが実感される。

周囲にも住宅は建ち、その住宅にも窓はあるが、角度がずれているためさほど気にならない。2階においても正方形の平面形状だからこそ、そして比較的小柄なスケールだからこそ、一般的な民家以上に四方に開かれているように感じる。1階では身体そのものが内部から外部へと拡がり、2階では身体感覚が内部から外部へ拓ける。

道路に沿って長方形平面の町家形式の住宅が多く建つ山間部で、ただひとつ地形に沿って正方形平面の民家形式で建てること

に執着したこの建築においては、この山間部を存分に愉しめる居住空間が実現されている。

「京北森林組合木造倉庫」

この建築は林業の復興が望まれる京北町にある。そして驚いたことに、この建築の周辺を見渡すと、木造建築がほとんど見当たらない。町のメインストリートであろう旧街道から細い道を入った奥の正面にこの建築はある。構造だけではなく外装も殆ど木で覆われたこの建築の存在感は、木造建築のほとんどないこの地域において際立っている。聞けば隣接するどこにでもありそうな駐車場と同様の形態にしたいらしい。言われたら全くその通りだが、言われるまで気付かない程にこの建築の佇まいは際立って綺麗である。

北山丸太の床柱以外での新しい使い方がまだ模索され続けているが、この建築での方杖としての使い方は、その解の1つを示しているように思う。この方杖により、大きくせり出した庇と、象徴的な立面の正面性が獲得されている。床から天井まで伸びる丸太は、途中で梁に挟み込まれているが、これは学生でも比較的容易に施工できるということで採用された工法である。そしてこの挟み梁工法により、長く真っ直ぐであることが特徴的な丸太は分断されることなく、長く真っ直ぐに伸びている。内部入ると1階では真壁の土壁に筋交いや

銅製ブレースやモルタルや木毛セメント板の仕上げが混ざるが、新旧が混ざっている

ような感じではなく、伝統的でも、現代的でもない空間が実現されている。2階の大部分は木で仕上げられており、片流れの低い方の天井高は相当低く壁の開口も殆どないにもかかわらず、トップライトから大量に採り込まれる光によりとても爽やかで明るくて開放的な空間である。

この建築の周囲を廻ると、裏側の一層部の2つの開口の間に、目地のように木の棧のようなものが打たれている。これは学生が切り損ねた結果発生した端材を無駄にしないため、そしてそれらを敢えて突き付けずに、目地で縁を切ったらしい。このために設計者自ら材を並べ、どの材をどこに使用するかの検討などを行ったということだが、このような周卓の結果、木材が突き付けられた箇所はなく、そして裏側の立面もただの裏側ではなく、裏側らしい正面性のようなものを獲得している。その他にも、限られた材や熟練されていない施工技術に対して、諦めるのではなく、設計や監理において執着し考え抜かれた結果、かえってより一層洗練された建築が実現されているのだ。建築により地域における木材利用が広がるのが期待されるような事例は枚挙に暇がないだろうが、そのような期待にこの建築ほど応えられたものはこれまでになかったのではないだろうか。この建築が現れたことが、まずはこの地域でこそ木造建築が見直されるきっかけになってほしいし、実際に木の建築が増えていくことを期待したい。

服部大祐

「越後町の家―路地を抜く家―」

オモテとウラを平面的に繋ぐ通り土間。黒光りする床面が裏庭からの光を反射し、人の意識を奥へと誘う。土間中央の吹き抜けを見上げると、頭上の天窓から注ぐ限定的な陽光によって上方へと意識が向かう。

通り土間の立面一杯に、軽やかな銅製フレームが架けられている。水平耐力要素を担うこのフレームが作る反復のリズムが、水平・垂直ともに空間の奥行きを強調する。フレームがもたらす奥行き効果によって、通り土間は膨張し、内部空間全体に実際の気積以上の広がりが生まれる。

「京北森林組合 木造倉庫」

衰退する地場の林業をいかに継承していくか。地域の手を借りながら、学生も巻き込んで進められたプロジェクト。ともすればウェットな話に終始してしまいがちな事件に対し、あくまでもそこで生まれた状況に對し、あくまでもそこで生まれた状況に建築表現に昇華させようとする態度が、構造形式から細かい造作まで、隅々に行き渡っている。

片流れの屋根が作る大きな立面は、通りに對して奥まった敷地に建ちながら「ここに居るぞ」と表明する建築の声だ。背の低い反対側のファサードは、背後を流れる川向かいに對しての静かな佇まいを生む。周囲のどのコンテキストも裏として扱わずに関係を取り結ぼうとする、建築家の意思がそこに現れて取れる。

「藤井厚二賞」「大原の家」

敷地形状に對して45度回転させたシンプル

な矩形をベースとした平面。

1階では4つの窓辺が、アプローチを含む4つの小さな庭との親密な関係を作っている。2階では四周ぐるりと開口が配され、室内を歩き回っている時には、視界は山裾で囲われた眼下の集落を捉えているが、腰を落着けると、一転して遠くの山並みおよび上空へと視線の距離が延びる。

絶妙に設定された開口部の高さ寸法によって、立つ・座るといった基本的な動作に依じて、意識の捉える領域が変化する。居心地の良い内部空間に居ながらにして、外部に向かつて意識がどこまでも広がっていくような感覚に包まれる。

訪れた全6作品のうち、上記3作品が特に印象深かった。それらに共通するのは、建築がその内に抱える空間の質のみならず、それ単体で完結することなく、より大きな何かと繋がっていくこととする建築家の意志、つまり執着の存在であったと思う。建築は、その内に抱える空間を作ること、宿命的に内部と外部の境界を生み出す。しかし、壁に囲われたり、その壁に窓が穿たれることによって、周囲に広がる風景に意識的になったり、再び外に出たあとの体験がこれまでと違って感じられたりする。

つまり、境界を作ることによって、新たな周縁とのつながり、あるいはそれに向かう広がりを獲得するのだ。そして、だからこそ、どれだけ大きな周辺環境（それは、物理的な空間の場合も、歴史性、つまり時間の場合も、あるいは人の内面に広がる精神世界の場合もあるだろう）との関係を構築していけるか、という

点が、一つの小さな建築にとつての重要な価値基準にもなるはずだ。

そんなことを改めて考えさせられる現地審査であった。現地審査にご協力いただいた建築家の皆さま、貴重な機会をいただきましてどうも有難うございました。

松隈章

「藤井厚二賞」も回を重ねて第10回目。審査員は1年限りと思っていたのに思わず昨年に引き続き審査員を指名され、この賞の受賞者で建築家の奥谷繁礼さんと服部大祐さんと一緒に審査を担当することになりました。2024年12月に審査員3人が集合、私からお二人に最近の研究で明らかになった藤井厚二が追及した日本の住宅という考え方と、新しい普通を作るための新しいチャレンジをした住宅創りについて紹介、テーマ設定のための議論の末に今年のテーマを「つきぬける執着」としました。

「藤井厚二賞」「大原の家」

大原の伝統的な民家のエッセンスを受け継ぎつつも、伝統の殻を突き抜けられるような、現代の大原の環境に相応しい住宅のプロトタイプの提示という設計意図のもと、周囲の自然と一体化できる木のぬくもりに包まれた豊かな住空間が広がっています。この地域の「道路に面して下屋を設ける」という厳しいデザインコードに定められた条件をポジティブ捉えなおし、さらに、前面道路に對して平面を45度傾けることにより、「切り妻屋根を載せた二階建ての母

屋」と「四方に伸びた下屋」による特徴的な外観と4つの異なった庭との関係を創り上げています。2階に配されたリビング／キッチン／書斎は、四面ぐるりと巡らせた横連窓により、大原の自然を360度切り取り室内に取り込む開放的な空間となっています。

「萩ノ台の住処」

京都市左京区岩倉に50年程前に建てられた木造住宅を、設計者の自邸兼事務所に改修し住み継ぐ計画。

山地を開発した前面で道路から谷までの落差約10メートルの傾斜地を生かしたダイナミックな住宅に対して、設計者は、斜面に対する建築の建ち方には、この建築単体というよりは斜面に建つ建築に共通するタイプロジーがよみとれ、設計した誰かの知性が明確に感じられると同時に大いに共感し、この建築に宿っている知性に執着し、受け継いで自分たちが生きる場所として再構築したとしています。そうした想いを現地で確かめたいと期待を持って現地審査に赴きました。確かに木の質感を大切に丁寧に施された改修は見事な住まいと職場の融合した上質な空間に仕上がっていました。が、空き家になって傷んでいた住宅は、おそらく元々このロケーションを生かした質の高い空間を持っていたと思います。今回の改修が、より高品質に「つきぬける執着」まで到達できているとは実感できませんでした。

「京北森林組合 木造倉庫」

京北の林業施業のための資材倉庫と車庫の建物。北山杉の生産の中心地区でありながら、周囲にある既存の資材倉庫は鉄骨造・スレートや鉄板葺きで、どうしてこうした地場産の杉を使った建物が今までなかったのか不思議なくらいです。設計、施工のプロセスの観点から、架構材の多くをサイズが大きいために使われていなかった木材倉庫に長く残る在庫材を利用し、地元の大工棟梁の工務店が請負い、大工工事のサポートとして京都市内の建築専門学校学生大工チームの育成も兼ねた点も、これからの大工育成への素晴らしい取り組みだと思います。前面道路から垣間見ることができ7本並んだ磨き丸太方杖と挟み梁によるファサードは、資材倉庫と車庫という機能を越えてこの地区の林業を象徴するアイコンとなる木造建築として美しく自立しています。今後、地域に拓かれたオープンな施設

としてより積極的に活用され地域に溶け込んでいくことも期待したいです。

「越後町の家―路地を抜く家―」

既存木造の水平耐力を補う柔らかい構造補強として通り庭沿いに設けられた屋根根まで達する鉄製の梯子状フレームにより、今までの町家の改修のレベルを超えた通り土間に立体的で豊かな内部空間を生み出すことに成功しています。一方で、奥の庭は作業場へと続き、東隣の路地と鉄

扉で繋がる。これらの周辺環境のみの空間体験を建築内部にも引き込むことで「町」と「家」の境界のようなものを取り除こうと考えた。との設計意図が示されていますが、その恵まれた中京区越後町の立地を十分に生かしきれてはいないと思いました。「家」が「町」に接する通りに面したファサードの在り方ですが、六角通りに面した入り口の引き戸と1、2階の寝室の窓が単なる擦りガラスのアルミサッシであり、奥の続きの飛び地が東側の路地に面するファサードも素っ気ない開き戸になっていました。障子を通した灯りが漏れ落ち、うちとそとを繋ぐ日本の風景を大事にした藤井厚二の想いに至っていないことが残念です。

「熊間」

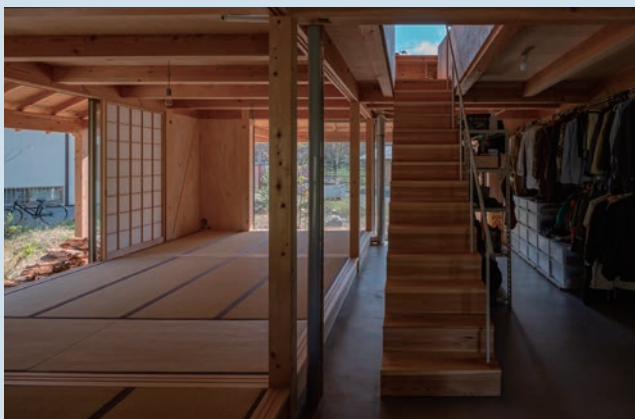
JRの二条駅からほど近い石畳の露路に面して立ち並ぶ2階建ての長屋の一軒を改装した住居兼ギャラリー。「自分が住んでいる長屋でアーティストが展示できる空間をつくりたい」との家主の想いに応えるべく、年に数回、アーティストや建築家、写真家、デザイナーなどの展示を行いながら、それをきっかけに住みながら改修を続ける極めて挑戦的なプロジェクト。書類選考資料の写真からは、露地に面した約100年前に建てられた長屋のひとつをセルフビルドで改装することによって街に開かれたいきいきとした空間へと転換されていることに魅力を感じ、現地審査に赴きましたが、確かに面白い取り組みではあるものの、ローコストとはいえ、あまりに粗雑なディテールとインスタレーション的な感覚に、建築

が持ち、建築家が目指すべき長持ちのする、「つきぬける執念」を感じることにはできませんでした。

「東裏辻BLDG」

旧市街地型美観地区指定された新旧の建物が混在する京都市上京区東裏辻町の角地に、4階建の駐車場付き倉庫を新築し、最上階にプライベートサウナを設けるという特殊なプロジェクト。2階建ての町屋が並ぶ風景から突出するプロポーションを単なる「不調和」ではなく、意図的な知覚の操作まで高め、周囲の環境に対し新たな視点を提供しようとした。としているが、現代の材料による屋根や庇を法令に併せて載せただけの不調和を感じました。倉庫とサウナだけというガラス開口部を持たない特殊用途を、外皮で包み込むシンプルな構成であるはずが、杉型枠の美しいコンクリート打ち放し仕上げが内側まで入り込んでいないことも、釈然としない徹底されていない印象が残りました。書類選考資料に記された歴史的景観に価値を認めるからこそ、高層化する都市が町家の表層的模倣に偏りがちな現状に、設計者としての抑え難い渴きがあった。それが私たちに与えての「つきぬける執念」と、現地審査で観た実物で実現されていることの間に違和感を持ちました。

設計者：森田一弥／森田一弥建築設計事務所、小寺磨理子／AMK



所在地／京都市左京区
用途／住宅
竣工／2020年3月

敷地面積／330.58㎡
建築面積／62.75㎡
延床面積／89.42㎡
構造規模／木造2階建て

京北森林組合 木造倉庫

設計者：高橋勝／高橋勝建築設計事務所 一級建築士事務所



所在地／京都市右京区
用途／倉庫兼車庫
竣工／2024年9月
敷地面積／489.01㎡
建築面積／157.83㎡
延床面積／247㎡
構造規模／木造(在来軸組工法)2階建て

萩ノ台の住処

設計者：殿井環／一級建築士事務所 殿井建築設計事務所



所在地／京都市左京区
用途／住宅、事務所
竣工／2024年7月
敷地面積／581.51㎡
建築面積／91.08㎡
延床面積／152.81㎡
構造規模／木造(在来軸組工法)
地上1階、地下1階建て



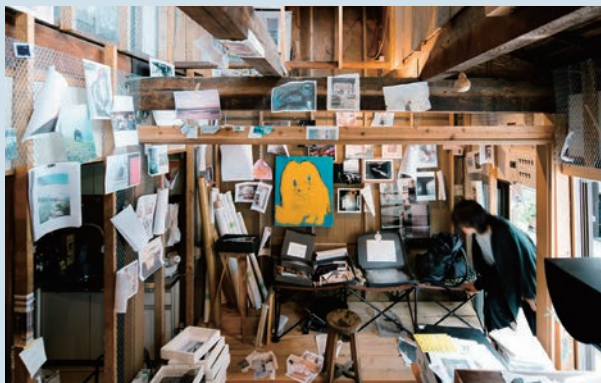
越後町の家 一路地を抜く家

設計者：川上聡／川上聡建築設計事務所

所在地／京都市中京区
用途／住宅
竣工／2024年11月
敷地面積／116.34㎡
建築面積／92.15㎡
延床面積／177.56㎡
構造規模／木造2階建て

熊間

設計者：浦田友博／一級建築士事務所 浦田



所在地／京都市中京区
用途／住居兼ギャラリー
竣工／2023年1月
敷地面積／45.74㎡
建築面積／26.19㎡
延床面積／42.29㎡
構造規模／木造2階建て

東裏辻BLDG

設計者：浅野大輔／(株)ボラ設計

所在地／京都市上京区
用途／倉庫業を営まない倉庫
(駐車場・浴室・サウナ付き)
竣工／2023年5月
敷地面積／82.81㎡
建築面積／41.00㎡
延床面積／140.93㎡
構造規模／鉄筋コンクリート造4階建て

